

特集

2

「実業×IT」で総合力を生かす NGNに突き進む日立グループ

「日立グループの通信事業は顔がよく見えない」と言われる。このレッテルを返す時が来ているようだ。キーワードは「NGN」。日立の代名詞ともいえる「総合力」をここで発揮することで、ユビキタス情報社会を自ら切り開き、支えていくという戦略だ。

「日立は運輸交通、自治体、都市など社会分野を幅広くやっている。電力、自動車、造船、重機、金融なども強い産業分野だ。これら実業をネットワークを核にしてつなげていき、ITの技術で新しいソリューションを提供できると思う。実業のノウハウと次世代ネットワークでユビキタス情報社会を支えていきたい。これが2010年に向けて日立グループが目指す姿だ。」こう語るのは、日立製作所情報・通信グループの竹村哲夫COOだ。

もともと日立製作所は日本有数の巨大企業。日立グループで通信ネットワーク分野に限定しても日立コミュニケーションテクノロジー(以下、日立コム)、日立インフォメーションテクノロジー、日立ハイブリッドネットワーク、日立電線、アラクスネットワークなど企業名は枚挙にいとまがない。どうしてもベクトルは分散しがちで、統一した姿は見えない。

グループの重心を回復する動きが急速に進んでいる。その核の1つとなるのが、日立製作所のネットワークソリューション事業部だ。約600名を擁する同事業部がいわばネットワークソリューション分野の司令塔となりつつ、情報や通信ネットワーク分野におけるグループの総合力を発揮する戦略を練っているわけだ。竹村COOはこの部署で責任者を務めてきた。

ここでは、日立製作所の描く次世代情報・通信グループ戦略と、そのコアを担う日立コムに焦点を当て、これか

ら日立が何を始めようとしているのか、追ってみたい。

基点はNGN

日立製作所の新社長に就任する古川一夫氏は、初めての記者会見で「通信分野で最も重視する事業分野は何か」という質問に対し、間髪おかず「次世代ネットワーク、NGNだ」と答えた。この考えは、現在の情報・通信グループの戦略の基点となっている。

まず第一に、キャリア向けネットワーク事業、端的に言えばNGNビジネスに日立グループが勝つことだ。

図1は、2010年度までのキャリア向け事業のロードマップだ。既存ネットワークからNGNへの移行に向けた事業内容は、「トランスポートストラタム」と「サービスストラタム」の2つに整理されている。前者は伝送・交換にあたるところで、WDM(Wavelength Division Multiplexing:波長分割多重方式)やキャリアグレードのルーターやスイッチなどハード製品が中心で市場規模は大きい。「大手通信事業者への納入実績が高いが、その他通信事業者にも採用されている」(竹村COO)という。

後者は、キャリアがネットワークサービスを提供するためのプラットフォームにあたるところで、各種サーバー製品、ミドルウェアなどが主要商品となる。最も先端技術と信頼性が求められる部分だ。ここでの日立の強み

は、「PROGNET(プログネット)」と呼ばれるネットワークソリューションに含まれるサービスプラットフォームだ。各機能をモジュール化し、その組み合わせにより柔軟なネットワークサービス機能を提供する。例えば、ネットワークへのログインやユーザー間通信の許可・拒否を一元的に管理するシステムで、プレゼンス情報を活用したマルチコミュニケーションアプリケーションや、エンドツーエンドのセキュアな通信アプリケーションなどを実現できる。NGNビジネスの成否は、ここでの高い信頼性が鍵を握ることになる。

このほか、固定・無線のアクセス網を構成する製品も手掛けている。固定系は光アクセス用のGPON/GE-PON、無線系はCDMA2000システムが中心だ。竹村COOは「アクセス系は市場規模が大きいので、重点的に取り組んでいる」と語っている。

NGNのキーポイント

イギリスのBTを先頭に世界の通

信事業者はNGNに向けて動きを速めている。NTTをはじめとする日本の通信事業者も、むろんこの流れに乗り遅れまいとしている。ここで問題となるのは、NGNとインターネットとの関係だ。インターネットは「オープン性」という点では、もちろん高く評価されているが、いざ社会インフラとして見た時、問題が多いのも事実だ。日立では以下の5つをあげている。

- エンドシステムのみでのサービス制御は非効率
- オープン環境におけるネットワークセキュリティ
- ネットワークの信頼性・安定性
- 複数のキャリア・ISP・サービス提供者にまたがる品質の規定と確保
- 通信料金定額化に整合するビジネスモデルが確立されていない
- インターネットの発展の単純延長線上に、NGNがあるわけではない。むしろ、日立は「NGNの構築に際し、インターネットの問題点をきちんと押さえ、安心安全な社会インフラとして成長させることが最も重要だ」と考えて



日立製作所 情報・通信グループCOOの竹村哲夫氏

いる」としている。ここで、日立が長年、ネットワークインフラ構築事業で培った技術力をNGNで発揮すべきチャンスなのだ。鍵となるのが、「ネットワークサービス制御」だ。そして、前述のサービスプラットフォーム・PROGNETが浮上することになる。最大の特徴は、前述のように、機能のモジュール化により柔軟なサービスプラットフォーム機能を形造る点だ(p.64の図2)。

竹村COOは、こう分かりやすく語る。「ウイルス対策の例で説明すると、エンドユーザーの責任でPC1台1台にセキュリティソフトをインストールし、常時アップグレードしなければならないのが現状だ。しかし、それでは老若男女が使いこなせるシステムにはならない」。これでは社会インフラとしては失格なわけだ。

図1 キャリア向けネットワーク事業ロードマップ

